第4編

「記憶」と「未来」

【OB座談会】

日時：令和元年12月11日
場所：塩釜地区消防事務組合本部 消防長室

高度経済成長期の終盤にあたる昭和40年代半ば、消防の広域化の流れの中にあって、塩釜地区でも5つの自治体からなる消防事務組合が誕生しました。設立から半世紀を迎え、OBの皆さんとともにその来し方を振り返り、エピソードや苦労話を交えながら、設立当時の様子や主だった災害などについて、現職の消防長も加わり大いに語っていただきました。

黎明期の組合の状況

渡邊　私は昭和36年に塩竈市の消防本部に採用されました。組合設立当時の苦労話は当時の上司からいろいろと聞いています。塩竈市は昭和30年代前半から水産都市として栄えてきましたが、若い人がどんどん東京などに就職で出て行ってしまう。そういった若い人たちがいなくなって災害に見舞われたときに誰が対応するのかという課題があり、広域消防にするべきだという話が出てきたと記憶しています。そうした話は組合発足の10年以上前から出ていて、ようやくまとまったのが昭和45年ということです。

藤原　私は消防組合に入る前、多賀城町の役場に勤めていました。当時の多賀城はまだ町でしたが、昭和38年の消防組織法の一部改正によって示された人口が3万人以上の市町村は消防本部及び消防署を設置するという基準に該当し、対応が求められました。そして、消防署をつくるためには専門の職員が必要なため、役場職員として消防学校に入校しました。昭和46年の1月には多賀城に分署ができ、翌2月3日に移転しました。それが私の消防職員としての一番最初の勤務地です。

渡邊　組合の設立前、常備の消防本部というのは塩竈市だけでした。当時は多賀城も町でしたから、ほかの二町二村（当時）と塩竈市は応援協定を結んでいました。火事その他の災害があれば塩竈市の消防本部から応援に出動する。それが協定に結ばれた内容でした。

組合設立にあたって難航したのは、常備消防と非常備消防である消防団との兼ね合いです。塩竈市以外は常備消防がなかったことから、非常備の消防団を頼っていました。そのため、多額の予算を使ってまで常備消防を作る必要がないのではないかという考えが、根本的にあったようです。それを説得したのが組合初代消防長の大沼盛さんです。この方は警察署長を務められた方で、なかなか理解を示してくれない関係者に硬軟を使い分けながら説得し、納得してもらうのに3年くらいかかったと聞いております。

また発足時の一番の課題は、消防職員が足りないということでした。当時の塩竈市消防本部の消防職員は57人だったと思いますが、それを分散するわけにもいかない。

藤原　当時の多賀城町役場からは、私を含めて4名が転籍しました。

渡邊　予算を負担する4町からは、「職員はいつ来るのか」「消防車はいつ配置するのか」という要望が頻繁に電話で寄せられていたため、それに応えるために、大量採用する必要がありました。しかし、消防職員は採用したらすぐに火災現場に出て活動できるわけではなく、基本的な教育をしなければならないので、即戦力というわけにはいきません。

藤原　われわれも新規採用みたいなものでしたね。

渡邊　当時の消防職員は、先輩や上司、階級の上の者が退職しない限りは、昇任試験がなく、3年も4年も試験がない時期もありました。そういう面では、大量採用するようになってからは、指揮系統の関係で階級の上の者を増やさなければならない。それで引き上げられた職員もだいぶいたように記憶しています。若い人たちにとっては、頭の柔らかいうちに昇任試験を受けられるので、よかったのではないでしょうか。

志賀　私が消防組合に入ったのは昭和49年の4月です。そのときもまだ若い人が中心でした。私はたまたま自衛隊に3年在籍した関係で、入ったときに同い年の先輩方がいっぱいいました。今では、消防学校初任科（総合）は1年ですけども、私たちのときは4か月だったので現場重視でした。4月に入って7月の末にはもう卒業、あとは現場で覚えるという状況でした。

渡邊　その当時、塩竈市は景気が良かったですね。市の東部に一本松地区というのがあって、大手企業の石油コンビナート区域がありましたし、水産都市としても活気がありました。当時の塩

座談会出席者

第8代消防長
渡邊 杜夫 氏
在職期間
昭和36年4月8日～
平成17年10月31日

元指令課長・職員OB会代表
藤原 正勝 氏
在職期間
昭和43年4月1日～
平成20年3月31日

第11代消防長
志賀　寧 氏
在職期間
昭和49年4月1日～
平成26年3月31日

消防長
柴　正浩 氏
在職期間
昭和55年4月1日～

進行：塩釜消防署 副署長
鎌田 勝広 氏
在職期間
昭和53年4月1日～

竈市は水産加工場が多く臭いがきつくて評判が良くなかったですが、浄化槽を整備したことでそういったこともなくなりました。しかし、1977年の200海里漁業水域の設定があってから魚の水揚げが急激に落ち込み、水産加工業が元気をなくし、当時と比べると今の塩竈は少し活気がないかもしれません。

宮城県沖地震、県民の森火災、8・5豪雨

藤原　昭和50年の12月に特別消防隊ができましたが、これはレスキュー隊の先駆けですね。

渡邊　いまは資機材もだいぶ揃ってきましたし、技術的、知識的なものも高度化してきましたが、このころは本当に創世期でした。そのころの一番の災害が、昭和53年の宮城県沖地震でしたね。

志賀　その日、私は非番で自宅にいて、ただごとじゃないなということで、近くに住んでいた上司を車に乗せて当時勤務していた松島分署に向かいました。利府街道を通って1時間ぐらいかかったでしょうか。松島に着いたらとある物産館の天井が落ち、死傷者が出ている状況でした。

渡邊　地震のとき、私は東京にいました。三鷹市の消防大学校に入校中だったのですが、東京でもだいぶ揺れました。ちょうど授業が終わって、校庭でソフトボールをやっていたのですが、誰かがテレビを見て、地震は宮城県だよと教えてくれて、次の日には塩竈に帰ってきました。常磐線でまるまる一昼夜かかりましたね。

藤原　当時、多賀城市内で火災が発生しましたが、市街地ではブロック塀の倒壊などが多く、消防よりも救急が多かったですね。宮城県沖地震の後、ブロック塀に鉄筋を入れるように建築基準法が改正されました。

渡邊　確かに、ブロック塀の倒壊で下敷きになって亡くなった人が多く、火災は少なかったように記憶しています。

柴　港湾では石油コンビナートのタンクが破損して重油が流出し、防油堤内に油が満タンになりましたね。

渡邊　その後、東京の消防大学校で一緒に学んでいた仲間の10数人が宮城県沖地震の被害を見に来て、大変驚いていましたね。当時から東海地震や津波が騒がれており、コンビナートの状況もあわせて、だいぶ関心を持って状況を見ていきました。

柴　今では、現職で宮城県沖地震を体験した方がだんだんいなくなっています。平成28年に県林野火災防ぎょ訓練をしたときに、開催地である利府町の鈴木前町長が「林野火災を経験した職員の方は手をあげてください」といったら列内に2～3人しかおらず、大きな火災を経験した職員も少なくなっています。

志賀　県民の森の火災は昭和58年ですね。私はそのとき七ヶ浜分署に勤務していたのですが、ホース乾燥棟の上の屋上にあがって、すごい煙だなと眺めていました。よもや出動がかかるとは、というような気持ちでした。

柴　そのとき私は非番で、鹽竈神社でお昼から塩釜消防署の花見が催されていました。

藤原　黒い煙というか、煤とかいろんなものが飛んできましたね。

渡邊　確か昭和46年に広島県の呉市で大きな※山火事があって、山火事というのはある程度峰まで炎がいってしまうと、風の吹き方によっては逆に戻ってくる。そういった特異性によってかどうかはわかりませんが、呉市消防本部の職員が消火活動中に18名亡くなっている。そういう事例が頭にありました。県民の森の火災出動の際には、ゴーッという音と、風も強かったですし、バリバリという木の焼ける音が聞こえてくる。

※広島県呉市山林火災　発生：昭和46（1971）年4月27日　発生場所：広島県呉市広町　出火原因：焚火による失火　死傷者数：18名（消防吏員）　焼失面積：340ha

消防車1台では何もできないということがわかりましたし、呉市の山火事のことを思い出しまして、一時退避してきました。それをたまたま見た住民から、消防が逃げ回っていて何も役に立たなかったというご意見を受けました。それでも、あのときは誰も亡くならずに済んでよかった。山火事は独特の動きをしますから、一方向にずっと燃えていくのではなく、また戻ってくる。実は大変怖いんです。

志賀　一番遠い七ヶ浜も出動指令がかかり、全車両が出ましたね。

藤原　全隊出場みたいなものですね。

柴　はい、全職員が出場しました。

渡邊　出火場所が当時の泉市で、仙台市から利府町にも拡大してきたので、隣りの黒川消防も仙台市消防局も出場しましたけども、石巻や仙南、大崎の広域消防からも応援がきました。本当かどうかわかりませんが、ススが石巻の方まで飛んだといいますから。実際あのくらい大きな火事であればありえないことではないと思います。

藤原　鎮火したのは、次の日のお昼すぎだったと思います。同じ日に、岩手県の久慈市でも林野火災があって、建物が多く燃えたからか、ニュースではそちらの方が取り上げられました。

志賀　大きな災害でいうと、次は昭和61年の8・5集中豪雨ですか。その時、私は多賀城消防署に勤務していたのですが、8月4日未明からがけ崩れの現場に入って、戻ってきたときには消防署は完全に冠水していまして、自分たちの私有車が全部水に浸かってしまいました。

多賀城の砂押川から塩竈市側一帯が、排水ポンプが機能しなくて浸水したので、その水が全部市街地へ入ってきて、多賀城消防署の前の国道45号線がちょうど私の首ぐらいまで水が上がりました。

柴　当時は私もまだ若かったのですが、吉田川に船外機を出して、住民の安否確認をした記憶があります。もう海のような状況でしたね。吉田川の北側（鹿島台町）の堤防が決壊しましたが、南側（松島町）も一刻の予断も許さない状況でした。

救急救命士の誕生

藤原　志賀さんは、救急救命士の第一期生でしたよね。

志賀　平成3年8月15日に救急救命士法が施行され、8月29日から東京の御徒町のテナントビル内の5階と6階にあった中央研修所で研修が始まりました。各都道府県から1名の推薦者と、政令指定都市から1名ないし2名の推薦者の総

勢60名が第一期生です。送り出してもらうときには餞別をたくさんいただきましたし、最初の2か月ぐらいは楽しく過ごしていましたが、その後は毎日テスト、テストで、後半は地獄のようでした。睡眠時間もできる限り削って勉強、そうでもしないと追いついていけないくらいでした。

渡邊　今の話のとおり、学科のほか実技なども多く行う必要があるため、一気に何百人も養成というわけにはいかず、全国で60名という枠でした。宮城県に関しては、仙台市は政令指定都市になっていましたから、合計で2人の枠がありました。その仙台市消防局から2人の枠は仙台市から出したいという意向が内々で聞こえてきました。しかし、ここにいる志賀さんが、「私も救急救命士研修に行きたいです」と話していたことを覚えていましたから、なんとか仙台市と話しをつけて送り出すことができました。そして、救急救命士研修所の第一期生となり、組合第1号の救急救命士が誕生するわけです。

志賀　当時は38歳で、年齢的にちょうど60名の真ん中でした。9か月ほどの単身赴任みたいな感じでしたね。消防学校の救急課程が終わって、一課程、二課程と段階的に上げていく教育をされたときでした。当時、みんな地方から出て来て、国家試験の合格を期待されていましたから、プレッシャーはすごかったですね。現在の神奈川県知事、当時はテレビキャスターだった黒岩祐治さんが、テレビ番組で特集を組んでおられましたので、毎週取材に来ていました。ノートをとっているところをカメラで撮ったりするので、できるだけ手元を隠したりしていました。教官も、一期生なので何を教えていいかわからないという中、医師の国家試験の学科や看護学を学んだり、どういう問題を出題すればいいのかもわからないという手探り状況で日々試行錯誤だったと思います。くる日もくる日もテストで、点数が悪いとすぐに呼び出されました。また、消防長が上京するたびに「頑張れよ」と激励の宴席をもってくれると、次の日のテストは必ず基準点以下でしたので、教授からは「激励に来るなと、消防長に言ってやるから」と言われたこともあります。研修所ではテスト結果が基準点以下の者を毎日張り出していました。それもご丁寧に赤い字で。これは厳しかったですね。挫折者も出るんじゃないかという話もでたぐらいでしたから、すごいプレッシャーがありましたね。

藤原　そして見事国家試験に合格して、初代の救急救命士になるわけですが、30代後半からの勉強はきついですよね。

志賀　前の日に勉強したことを、翌朝のテストに出されても覚えていられない。当時の宿舎はウィークリーマンションの一人部屋だったのですが、同じマンションに29歳の東京消防庁職員もいたので、いつも「教えろ！」と押しかけていましたね。

東日本大震災の現場

藤原　東日本大震災のとき、私は既に退職していて利府町役場の防災担当職員でしたが、組合の指揮をとっていたのは志賀さんでしたよね。

志賀　ええ。当日は、たまたま指令センターにいました。大きな揺れが長く続く。津波が来るだろうというのがピンときて、とにかく消防車は高台に避難させようと塩釜ガス体育館の方に向かわせました。職員と塩釜消防署周辺を車で走りながら、避難するよう広報したけど誰も逃げない。指令官は残らなくてはならないという中で、消防署の前を

津波が押し寄せました。そして津波から逃げる人たちが一気に消防署に駆け込んで来ました。津波が1波、2波、3波と押し寄せ、付近住民20数人が避難している。夕方になってその人たちに食べ物を提供したら、職員の食べるものが何も残っていない状況になり、一晩は苦労をかけてしまったということがありました。

渡邊　あの地震の長さは私自身も体験したことがないし、地震と津波は連動するものだと思っていますので、「津波が来るな」という思いはありました。妻が会社勤めをしていたのですが、妻を迎えに行ったあとすぐに避難しました。

藤原　先ほどもお話ししたとおり、私は利府町役場にいました。すぐに災害対策本部が立ち上がり、行政区長あてに無線連絡が取れるようになっていました。

柴　我々はその時、カーラジオからの情報しか得られなくて、志賀次長（当時）と私が持っている携帯だけが公用の災害優先電話でした。普通の携帯電話はつながらない状況で、我々二人しか電話が通じず、情報を常にやりとりしていました。状況が落ち着いてきたときに、高台から下がって状況を見てきてくれと言われて、消防車両で塩釜消防署近辺を調査しましたが、惨憺たる状況でしたね。

志賀　消防本部はケーブルテレビが入っていたのですが、そのケーブルテレビの基地局が津波で被災したため、テレビから情報を得ることはできませんでした。普段聞き慣れていないラジオなので、情報収集がスムーズに行えない。さらには災害優先電話に、国から頻繁に電話が入り、その対応も大変でした。国は映像を見ながら、「何が燃えているんですか」、「どこなんですか」と一方的に聞いてきますが、こっちは何も情報源がない。明けた次の日、当時の予防課長を自衛隊のヘリに乗せてもらうよう頼んで、管内の様子を上空から写真に撮影するように指示しました。

　また、石油コンビナートの火災も、まだ津波が引いておらず浸水状態だったので、何が燃えているかわからない。しばらくして水が引いたころ、朝4時ぐらいに徒歩で実際にコンビナート構内に入って現場を確認しました。いざ消火しようにも化学車は近くまでは入れない状況だったので、可搬ポンプ2基と消火薬剤を持っての活動でした。消火薬剤も海水だと発泡効率が悪くなるので、川の水のほうがいいんじゃないかと当時の警防課長と協議しながら、緊急消防援助隊に応援をいただいて、なんとか消火しました。980kℓのガソリンタンクが、火を噴いていました。中継バルブを止めさせて、そこからひたすら消火活動を行いました。そのときは硫黄タンクも燃えていましたが、硫黄は燃えても炎が見えません。蜃気楼みたいな透明な状態になって、とにかく臭いもきつかったので近づくなと指示を出しました。隣のアスファルト貯蔵タンクも燃えていたのですが、それよりもとにかくガソリンタンクを消火しなければいけないだろうということで、夢中で活動しているうちになんとか消し止めたというような状況でした。

これからの組合活動への期待

柴 これまでの活動を振り返ったうえで、今後の組合の活動に対してどういったことを期待するか、いかがですか。

渡邊 消防組合は、塩釜地区二市三町で運営しているわけですけども、全国の消防防災の課題が凝縮したような地域です。例えば離島がある、観光地がある、文化財がある、石油基地がある、ホテル・旅館も数多くある、漁港もある。そういうことを考えると、それに適切に対応するには日ごろからの訓練と勉強しかないというのが一つあります。もう一つは災害現場で、上司は部下に対してさまざまな指示します。ところが現場ではたくさんの声や音が飛び交うもので、上司の指示がなかなか届かない場合があります。そうすると、必然的に大きな声になる。指示を受けた職員が、上司に怒鳴られたと受け取るかもしれません。確かに事務仕事をしているときならそうかも知れませんが、災害の現場、救急の現場ではそうはいきません。そこの意識を持って、訓練に励んでほしいなというのが希望です。

藤原 私も渡邊さんが話したように、二市三町の特性がそれぞれ違うので、それを踏まえてこれからも頑張っていただきたいです。

志賀 先輩方がお話ししたとおりなのですが、今は異常気象が原因で多種多様な災害が起きている。その割に若い世代が経験不足というのが最近目立つように思います。これをクリアするには、やはり常日ごろの実地訓練や図上訓練、シミュレーションなどが重要になってきます。そして、それが現場でどれだけ生かせるか、消防はやって当たり前の世界ですので、成功して当たり前と思われています。そこだけは肝に銘じて、世代をつないでいただければありがたいと思います。宮城県内では、仙台市消防局が他の消防本部に比べ極端に規模が大きいですが、その次はというと、この塩釜地区消防事務組合を挙げてくれる方が多いです。そのぐらい期待度は大きいのかなと思っていますので、柴消防長の腕の見せ所と思っております。

柴 ちょうど私も40年勤務しました。振り返りますと入庁時と今とでは全く違うと思います。先輩方がおっしゃられたように、職員の価値観も変わってきています。指導する方も苦労していますし、指導を受けた方も不満がたまるといいますか。実際の現場では、そうした人間関係でひずみが生じているという現状もあります。今回の座談会にあたり、20周年の記念誌をひもといてみましたら、消防論の記述がありました。ゆるぎない消防精神、消防論というのがあって、地域に寄り添った消防でなければならない、消防の生命はまず初期消火だ、というのが一つ。もう一つは、予防消防というのが非常に大事で、消防団などの関係もしっかりと連携をとらなくてはなりません。あとは市町村、地域に根差している限りは自治体消防の責任でやるべきだという記述を読んで、現在も消防精神は変わらないということを感じました。改めて40年を振り返り、責任ある立場として、変えない部分は変えないで、時代に合わせるところは合わせていかなければならないのかなと感じたところです。

参加者の皆さまからは過去のご記憶をもとに、ご自身の経験や消防に対する想いを語っていただきました。限られた時間ではありましたが、後世に語り継ぐべき現場の声が多くありました。これからの組合消防にとって貴重な財産としてここに記し、ご参加4名の皆さまへ心より御礼を申し上げます。

【これからの組合】

多賀城消防署新庁舎建設

（供用開始予定　令和3年4月1日）

◆建設地：多賀城市八幡字一本柳117-17
◆敷地面積：4698.07㎡
〔消防庁舎〕◎延床面積：900㎡程度
◎主要構造：鉄筋コンクリート造、2階建て
〔消防車両車庫〕◎延床面積：720㎡程度
◎主要構造：鉄骨造、平屋
〔屋外訓練棟〕◎延床面積：150㎡程度
◎主要構造：鉄骨造、2階建て

現在の多賀城消防署（多賀城市鶴ヶ谷）の老朽化と、発展する多賀城市の災害時防災拠点の中枢施設となるべく、新庁舎の建設が進んでいる。消防署としての機能や災害時の活動拠点としてはもちろんのこと、男女問わず職員の働きやすさも考慮した設計となっている。また、地域住民との交流も想定し、来庁者視点の整備も行っている。

そして多賀城消防署は、管内唯一の特別救助隊が運用する救助工作車を配置しており、主要幹線道路及び高速道路を利用し管内全てに出動しているため、より高速道路のインターチェンジに近くなることで機動性も増すこととなる。

新多賀城消防署の整備により、管内住民の安心安全、満足度をさらに上げることができるだろう。

多賀城消防署新庁舎完成予想図

東京2020オリンピック開催に向けて

◆会場：宮城スタジアム（利府町）
◆開催競技：◎女子サッカー予選6試合、準々決勝1試合
◎男子サッカー予選2試合、準々決勝1試合
◆競技日程：7月22・25・28・29・31日、8月1日

東京2020オリンピックは、2002年サッカーワールドカップ日韓大会以来の国際スポーツ大会警備となる。当日は防衛省、海上保安庁、宮城県警察本部と連携・協力して警備活動を行うことになるため、現在も合同訓練を重ねている。具体的な連携先は陸上自衛隊第22即応機動連隊、宮城海上保安部、塩釜警察署となり、令和元年9月の訓練では宮城スタジアム入り口付近で爆発が発生したと想定しての訓練を実施した。訓練内容は化学テロの可能性を考慮した検知活動や、負傷者の搬送訓練、爆発物処理訓練など相互間連携の必要性を再認識する機会となったエーションを想定した訓練を継続していく。

また、当日の警備業務の準備・運営のため、当組合の職員1名をオリンピック組織委員会へ派遣している。当日は会場警備の副責任者を務める予定で、関係機関との連携の〝要〟として活躍を期待したい。

グランディ・21　宮城県総合運動公園

東日本大震災の被災地でもある管内市町の元気な姿を世界に届ける機会でもあることから、地域全体が一つとなれるよう組合として最大限の貢献をしていきたい。

新斎場の建設

（完成予定　令和3年6月30日）

◆建設地：利府町森郷字名古曽地区
◎敷地面積：約2万1600㎡　◎延床面積：2795㎡

現在の塩竈斎場（火葬場）（塩竈市袖野田町）は大正15年に開設され、現在の建物は平成6年3月から稼働を始めた。周辺の宅地開発が進んだことと、今後の需要を受けるだけの能力を備えた火葬場の整備が早急に求められており、新斎場（火葬場）の建設をすることとなった。建設予定地の選定は施設の性質上難航することとなったが、地権者のご協力と地域住民のご理解をいただき、利府町森郷字名古曽地区に移転することが決定した。この場をお借りして改めて御礼を申し上げたい。

施設概要としては、利用者の快適性や利便性もよく考慮し、バリアフリー化やキッズコーナーの設置も図った。また、亡くなったペットの火葬もできるよう動物炉の新設も行う。

故人との別れの場としてふさわしい施設とその運用に努めていきたい。

塩竈斎場（火葬場）イメージ図